

青い空に溶けていく

flanker

本編

視界に映るのはアスファルトの黒、そして新鮮味など欠片も無い見慣れた街並み。他愛もない、それでいながら輝かしい夢など小学校と共に卒業している。高校生の自分が親や先生にかたる夢は自分の身の丈に合った職業。

もしかしたら自分はなりたがっているのかも知れない、小学校の頃、無邪気な頃に望んだ自分に。

自分はいつの間にか旅に出ていた。旅といっても所詮は金の無い学生。電車でちょっと未知の町への日帰り旅行だ。塾をサボったが授業を一回休んだくらいではるか彼方へ置いていかれるほど自分の頭は悪くない。帰った後の親からの言及は免れられないだろうが、今の自分には他人事のようにだった。

そして自分は海岸に立っていた。
なぜ海なのか？
と言われると返答に困る。
強いて言うなら広大な海を眺めて――

「……ちっぽけだな、この海に比べると俺なんて」

――そう、このセリフを言ってみただけ。
いや、誰でもあるでしょ？ こういうの。
親友と本気でケンカしたり。
告白するならロマンチックなムードで、とか。
まあ人には一度置かれてみたいシチュエーションってもんがあるんですよ。

自分の場合はこれなわけ。

で、なにか劇的な変化でも起こったのかと言われると……。
うん、あんまないね。
笑えよ、誰か。
どこかしょっぱい青春十八の旅。

だんだん自分自身がいたたまれなくなってきたのできびすを返そうとしたが、せっかく海へ来たのだ、もう少し海を眺めてみる。
テレビなどで取り上げられる南国の海の透き通るような淡い青とはまた違う。
緑色が少し入ったような、紺色。

太陽光を反射してキラキラと光る水面。
地球は丸いと主張するかのように水平線はゆるやかな弧を描いている。
なるほど、改めて見ると海もいいもんだ。
この綺麗なものが地球の三分の二を占めているのかと思うと身震いさえする。

波の音が心地よい、まるで子守唄のようだ。

ふと上を見上げる。
空があった。
何も珍しいものではない、青い空。
ただ、その青い空が自分の目には美しいものとして映っていた。
ゆったりと回遊魚のように流れる白い雲。
宝石など比ではない程のまばゆい光を放つ太陽。
澄み渡る青を「空色」の一言で言い表すのはあまりにも惜しい。

ああ……こんなに近くにもあったのか。

海は地表の三分の二をカバーしている。
それに対し空は一分の一。全てだ。
海をも凌ぐ広大さ。
今更ながらこれを「すごい」と言わずして何と云うべきか。

地球は綺麗だ。

もう自分は下を向かない。
上を目指して夢を掴もう。
青空を仰ぎ太陽に手を伸ばすように。